

水谷 年惠

ホーホケキヨ、ホーホケキヨ、お池の岸の梅の木の枝で、鶯が美しい聲で歌ひました。お池の中の龜が、

「何ていい聲だらう。」

と感心して、水の中から頭を出しました。

ホーホケキヨ、ホーホケキヨ、又鶯が美しい聲で

歌ふと、龜はたまりかねて、

「鶯さん、鶯さん、あなたはいいお聲ですね。」

と聲をかけました。鶯は下の方を見下して、

「おや、龜さん、今日は、いいお天氣だから、歌を歌つてゐるのですよ。あなたも日向へ出ていらつしやいな。」

龜は岸へ這上つて、

「鶯さん、高い所へ上つてゐたら、いい氣持でせうね。」

「いい氣持ですよ。方々が見えましてね、むかふの方に山があるんですよ、こつちには野原があるんですよ。お山では木の芽が出ましたよ、野原ぢやあ草が生えましたよ。」

龜は自分も高い所へ上つて、方々が眺めたくありません。

「鶯さん私も木の上へ上つて見たいね、何とかして上れませんか。」

「さうね、上れるかも知れませんが、一寸上つて御覧なさい。」

龜は梅の木へ登らうと思つて、根元から這上らうとしましたが、ちつとも登れません。それでも龜は一生懸命で、うん／＼言ひながら上らうとしてゐます。鶯は枝の上から、

「しつかり、しつかり。」

と掛聲をかけて居ります。梅の木の upper を、一羽の鳥が、

「アホラー、アホラー」

と言つて飛んで行きましました。

大空に輪を描いて居たトンビが、高い聲で、

「ビー、ヒヨロ、ヒヨロ、ヒヨロ、ヒヨロ。」

と鳴きましました。

其の時、梅の木の下を、

「モーウ。」

と鳴いて牛が通りかかりましました。鶯はバツと飛立つて、何處かへ飛んで行つてしまひましました。

龜は大あはてにあはてて、お池の中へ、ドブンと飛込んで、もう頭を出しませんでしたとさ。

ボン太郎の石ころ

ボン太郎が山へ行つて、薪を切つて居ましました。お晝になつたので、お辨當を食べようと思つて、

お家から持つて來た握り飯を食べかけましました。すると、ボン太郎の側を一人の旅人が通りかかりましました。其の旅人は大變おなががすいてゐたので、よろしくしてゐました。

それを見たボン太郎は、可愛想だなあと思つて「もし、もし、あなたはおなががすいて居るのでせう。さあ此の握り飯を一つお上りなさい。」と言つて、握り飯を一つ差出しました。旅人は喜んで、

「御親切に有難う。それでは頂きます。」と言つて、うまさうに食べました。ボン太郎は自分も嬉しくなつて、

「さあ、もう一つどうです。」といつて、又一つ上げました。あと一つ残つてゐましたが、ボン太郎はそれも旅人にやつてしまひました。それでボン太郎は一つも食べませんでした。

旅人は握り飯を食べて、大層元氣づきました。そしてボン太郎に何遍もお禮を云つてから、袂の中から石ころを一つ取出して、

「何もありませんから、お禮の印に此の石ころを差上げませう。どうぞお取り下さい。」

と申しました。ボン太郎はお禮などいらなと思ひましたが、旅人が折角呉れるのですから、其の石ころを貰ひました。

旅人が行つてしまつてから、ボン太郎はおなかのすいて居るのを我慢して、夕方まで薪を切りました。ボン太郎は仕事をしまつて、お家へ歸らうと、山路を急いで來ると、横の方で、

「ウオー。」

といふ恐しい聲がしました。ふと其の方を見ると一匹の狼が眼を光らせて、ボン太郎の方へ近寄つて來ます。ボン太郎は驚いて、思はずさつき旅人から貰つた石ころを懐から出して、狼の頭を目がけて、ボンと投げつけました。狙ひがあたつて、狼はコロリと倒れて、死んでしまひました。ボン太郎は大喜びで其の石ころを拾つて懐に入れ、狼の死骸を肩に擔いで歩きました。

すると、今度は頭の上で、バサリ、バサリといふ大きな羽ばたきの音がしました。ふと見上げる

と、恐しい鷲が、爪を擴げてボン太郎に攫みかゝつて來ます。ボン太郎は吃驚して、すぐに石ころを出して、鷲の眼玉目がけて、ボンと打ちつけました。すると鷲はバタリと地面へ落ちて、すぐ死んでしまひました。ボン太郎は大喜びで石ころは懐の中へ入れ、鷲の死骸は狼と一緒にして、擔いで行く事にしました。

少し行くと、眼の前へ眞黒なものが、ニユツと立ちました。オヤツと思つて、よく見ると大きな熊が後足で立上つて、兩方の前足をつき出して、ボン太郎に打ちかかつて來ます。ボン太郎は熊の腹を目がけて、さつきの石ころを力一ぱい投げつけました。熊はドーンと倒れてダーウと死んでしまひました。

ボン太郎は飛上つて喜びました。ボン太郎は石ころを懐に入れて、狼と鷲と熊とを肩に擔いでお家へ歸りました。

お父さんやお母さんは、ボン太郎が強い獸や鳥を退治したので、大層喜んで、ボン太郎に澤山の御馳走を拵へて下さいました。